

英語学・言語学の可能性

上野 誠 治

0. はじめに

言葉は、音声として発話される場合、基本的には物理的な音の連続体である。誤解を避けたり、曖昧さをなくすために、適当なところで休止 (pause) を入れることもあるが、言葉自体に切れ目があるわけではない。虹は物理的に連続した太陽光が波長の違いによって7色に分かれたものであるが、赤・青・黄などと截然と分かれているわけではない。あくまでもわれわれが、それを7色として認識しているに過ぎない。人によって、あるいは言語が異なれば、別の認識もあり得るのである。実際、鈴木(1990:60ff)によれば、アメリカでは学校教育や百科事典では虹は7色となっているものの、民衆レベルでは6色が普通のことである¹。

連続的 (continuous) なものを、離散的 (discrete) あるいは非連続的 (discontinuous) なものに分節 (articulation) する性質は、人間に顕著に見られる能力である。また、この分節性は人間言語を特徴づける性質の一つでもある。その他に、恣意性 (arbitrariness)、転位性 (dislocation)、生産性 (productivity) などの特徴が人間言語には見られるが、動物の「言語」には、そういった特徴が限定的にしか観察されないことはよく知られている。その意味で、人間言語は文字通り、人間にのみ備わった能力なのである。そうであれば、言語を研究することによって、人間の認知能力が解明され、人間とは一体どのような存在なのか、という問いにも何らかの答えを提供し得るはずである。

言語には色々な規則性や法則がその背後にあると考えられるが、それは自然科学のものとは趣を異にする場合が多い。規則性といっても、絶対的なものから相対的なものまで、さまざまなレベルのものが存在する。規則が必ずしも絶対的でないのは、言語を駆使する主体が、まさに人間だからであろう。人間は単に物理的な存在なのではなく、意思を持った存在だからである。

以下、第1節では、英語学と言語学の関係について考察し、英語学が言語学の下位分野の一つであることを再確認したいと思う。第2節では、事例研究として、混交 (contamination) と呼ばれる現象を中心に、英語の背後にある規則性を探る試みを、多少概略的ではあるが、実践する。第3節は、第2節の事例研究を踏まえて、英語学研究あるいは、言語学研究がどのようなものであるかを考えてみたい。第4節はまとめである。

1. 英語学と言語学

1 鈴木孝夫(1990)『日本語と外国語』東京：岩波新書 赤101.

1.1. 日本における英語学

「英語」を特色とする学科であれば、ほとんどの大学において、「英語学」という科目を開講していると思われるが、その中身について一般にはあまり正確に理解されていないようである。昔のいわゆる英文科にはたいてい、英文学専攻と英語学専攻が設けられており、英語学は英文学との対語であった。英文学は主としてイギリスの文学やアメリカの文学を扱うが、その中にはカナダ文学などの英語を母語にする国々の文学も含まれるようになってきている。

一方、英語学は本来、「英語(English)の言語学(linguistics)」を意味する学問領域であるが、単に「英語の学」と受け取る人も多い。例えば、高校で「生物」、「物理」という科目だったものが、大学で学ぶときには「生物学」、「物理学」と呼ばれるように、高校までの「英語」が大学で「英語学」と進化あるいは深化するような受け止め方である。しかし、高校までの英語は主として、「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能(スキル)の学習が中心である。通常、その背景にある英語という言語そのものの仕組みなどは学習対象とはならない。もちろん、英文法という形でそれに類するものは学習するが、それは規範文法(prescriptive grammar)であるために、仕組みを解明するというよりは、表現法を習得することに重点が置かれる。

とは言え、英語学という用語が、上に述べた英語の学習とほぼ同義で用いられていたと思われる歴史もある。『日本国語大辞典』に以下のような記述が見られる²。

(1) 英語を研究対象とする学問。

*日本教育史略〔1877〕教育志略〈大槻修二〉「二月初めて女学を南校中に設け、小学科に英語学を加へ」

*風俗画報 - 一七七号〔1898〕大日本英語会「其目的とするところは。英語学(エイゴガク)の普及を謀らんが為め」

ここで定義されている「英語を研究対象とする学問」とは、その用例からも推測されるように、学校での英語教育を指していると思われる。もちろん、当時は学業優秀なエリートたちが学校で教育を受けたであろうから、十分、学問の水準に達していたのかもしれない。

では、英語学を「英語の言語学」という意味で用いる場合の言語学とは何かを『日本大百科全書(ニッポニカ)』で見てみよう。

(2) 人間言語を対象とする科学的研究。実用を目的とする語学とは異なり、言語

2 “えいご - がく【英語学】”、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<http://japanknowledge.com> (参照 2015-02-24)

そのものの解明を目的とする。よく誤解されるが、言語学は、古い時代の言語とか語源だけを扱うわけではなく、過去、現在をともに対象とする。直接に観察できる現代の言語を対象とするほうがむしろ研究上有利であり、言語の本質に迫りやすい。諸言語を広く見渡して研究する一般言語学と、個々の言語を研究する個別言語学とがあり、国語学も個別言語学の一つである³。

まず注目したいのは、「科学的研究」と「実用を目的とする語学とは異なり、言語そのものの解明を目的とする」という記述である。通常、中等教育で実践されるのは「実用を目的とする語学」であって、科学的研究ではないであろう。現在の大学教育において、専門課程における言語学や英語学は、この「科学的研究」という意味で用いられている術語であることに注意する必要がある。なお、上の引用の中にある国語学を英語学に置き換えると、英語学は一般言語学の一分野としての個別言語学ということになる⁴。

浅田(1997:7)は、英語学とは何かという問いを考察するに当たって、英語に関連した研究分野として①英(米)文学、②英米地域(文化)研究、③英語学の3つを挙げ、それぞれの分野における英語の位置づけが異なることを指摘している。すなわち、英語学こそが「直接に英語という言葉の研究する」、換言すれば「言語の本質」に迫る唯一の分野であり、その点で、英語の位置づけが間接的な他の二分野とは異なるのである⁵。

最後に、英語学を形態論的に分析すると、2通りに曖昧であることがわかる。

- (3) a. 英語学 ← 英語一学
- b. 英語学 ← 英[語+言]語学 ← 英語+言語学

(3)a は「英語の学(問)」という意味の派生語(derivative)とする解釈であるが、この場合の英語学は、むしろ English studies に近く、科学的研究としての英語学よりも広義である。他方、(3)b は、英語と言語学の混成語(blend)で、狭義の、すなわち「英語言語学」という意味の英語学を指す⁶。

1.2. 海外における英語学

前節では日本国内における英語学の位置づけを概観したが、本節では海外における英語学について考察する。日本では、誤解はあるものの英語学という表現はよく用いられ

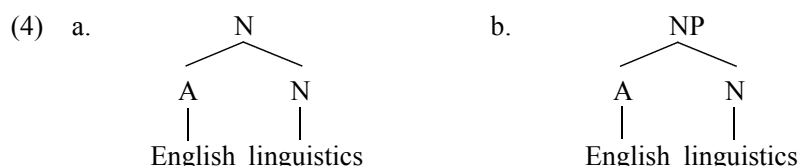
3 “言語学”、日本大百科全書(ニッポニカ)、JapanKnowledge、<http://japanknowledge.com>、(参照 2015-02-24)

4 近年は、国語学に代わって日本語学という表現が使われることが多くなっている。

5 浅田壽男(1997)『新版 英語学講義』岡山：大学教育出版。

6 影山太郎ほか(2004)『First Steps in English Linguistics —英語言語学の第一歩—』東京：くろしお出版。

ている。しかし、国外で使用される English linguistics は「英語学」という語というよりは、「英語の言語学」という句である。形態論的に分析すると、それぞれ以下のようになる⁷。



すなわち、(4)a は 1 語であり、(4)b は 2 つの形態素からなる名詞句である。English linguistics はいずれの場合も分かれ書きされるので外見上はまったく同じに見えるが、形態素構造は異なるのである。White House はホワイトハウスという複合語であり、white house は単に白い家のことである。他方、複合語で分かれ書きされない場合もある。例えば、温室は通常、greenhouse と書かれ 1 語であるのに対して、green house と 2 語で書かれた場合は緑色の家という名詞句である。

English linguistics という表現に関して、Nakajima(1991:3)は次のように述べている。

- (5) The expression “English linguistics” may sound somewhat strange to Westerners, who use the term “linguistics” to denote the study of human language in general, and not that of a particular language. However, the study of linguistics in the Western sense is very rare in Japan; most linguistic activities are concerned with particular languages. The term “linguistics” is sometimes even understood to be equivalent to “theoretical linguistics of English”, because linguistic study of English is the most common type of linguistic work carried out, and the theoretical approach is that most common in English linguistics.

すなわち、English linguistics (英語学) が、西洋の人々にはいくぶん奇妙に聞こえるのは、linguistics が人間言語一般 (human language in general) の研究を含意するため、その修飾語として個別言語 (particular language) である English が添えられると、意味的に矛盾するからである。一方、日本においては、linguistics が英語についての理論言語学 (theoretical linguistics of English) と同等の意味で理解されることも多く、それは英語の言語学的な研究が言語研究の中でも最も一般的なものであり、理論的なアプローチが英語学の中で最も一般的だからである。しかし、かりにそれが事実であっても、やや英語中心主義的な暗黙の了解がこの説明の背景にはあるようにも感じられる。

⁷ N は名詞 (noun)、A は形容詞 (adjective)、NP は名詞句 (noun phrase) を表す。

また、Aarts and McMahon(2006:1)は、自らの著書について次のように述べている⁸。

- (6) When you picked up this book you may have been struck by the phrase English Linguistics (EL) on the cover. What is English Linguistics?

さらに、English Linguistics が最近の用語ではないとして、過去に出された出版物で English Linguistics が書籍の表紙に表れているものを紹介している。その中で一番古いものは、Harold Byron Allen(1966) (ed.) *Linguistics and English Linguistics: a bibliography* (New York: Appleton-Century-Crofts)であるとしている。その他にも二、三紹介されているが、Aarts によると、English Linguistics が広義にも狭義にも使用されているという。後者の事例は、John P. Broderick(1975) *Modern English linguistics: a structural and transformational grammar* (New York: Thomas Y. Crowell Co.)である。また、現在は、English Linguistics は、ヨーロッパで最も使用されており、他方、北米地域では、いわゆる英語学の課程や講義科目はあるものの、英語学(English Linguistics)という分野はないという。イギリスにも Department of English Linguistics というものはないが、Department of English Language や Department of Linguistics and English Language のような学科を持つ大学はいくつかあるという。

2. 事例研究：混交

この節では、事例研究として混交 (contamination) と呼ばれる現象に焦点を絞り、以下の6つの項目について考察する。

- 2.1 節 longer . . . the less
- 2.2 節 形容詞 + enough that 節
- 2.3 節 different than / to
- 2.4 節 both A, but also B
- 2.5 節 which is why
- 2.6 節 This is Harry speaking.

2.1. longer . . . the less

まず最初に、次の例文の longer と the less の関係について考察する。

- (7) No one language is the ‘world’s hardest’, but any language takes **longer** to learn **the**

8 Aarts, Bas and April McMahon (2006) *The Handbook of English Linguistics*. Massachusetts: Blackwell Publishing.

less it has in common with your native tongue.⁹

(Emphasis added.)

これは、どんな言語でも母語との違いが大きいほど習得には時間がかかる、ということ述べた文であるが、通常であれば、The more, the better.のように、「the +比較級、the +比較級」となるところであるが、ここでは longer という比較級の前に the が置かれていない。

もう一つ特徴的なのは、本来であれば、the less it has in common with your native tongue, the longer any language takes to learn という語順になると思われるが、less と longer の位置が、換言すると、主節と従属節の配置が逆になっている点である。

(8) any language takes longer to learn the less it has in common with your native tongue.

(Emphasis added.)

この文を理解するためには、まず「the +比較級、the +比較級」という基本構文に関する文法知識を土台として、問題の文を分析することが出来なければならない。また、可能であればその分析が間違っていないことを保証する言説を文法書や辞書などに見出すことも必要であろう。『英語語法大事典』には、類例として以下のようなものを挙げている¹⁰。

(9) a. The bigger the expectation, greater will be criticisms hurled against it.

b. More I see of that man the more I like him.

c. And they seemed to get worse the longer he was in the shop.

(Emphasis added.)

(9)a は the bigger . . . , (the) greater . . . が本来の形で、従属節・主節の語順をとる。(9)b は (the) more . . . , the more . . . であるが、従属節の方の the が省略されている点で(9)a とは異なる。(9)c は (the) worse the longer . . . で(9)b に外見上類似しているが、意味を考えると主節・従属節の語順となっており、(8)と同じ配置になっている。以上のことから言えることは、①「the +比較級、the +比較級」構文でいずれかの指示副詞 the は省略され得る、②主節と従属節の配置が逆になり得る、という点である。このような特徴を理解して初めて、(7)の解釈が保証されるのである。ただし、『英語語法大辞典』は、これが比較的まれな構文であり、通常、the は省略しない方がよいと結論づけている。

9 Rickerson, E. M. and Barry Hilton (2012) *The 5-Minute Linguist: Bite-sized Essays on Language and Languages*. Second Edition. Sheffield, UK: Equinox Publishing Ltd. p. 274.

10 石橋幸太郎ほか(1966)『英語語法大事典』東京：大修館書店。なお、例文に施された下線および点線は筆者による。

2.2. 形容詞＋ enough that 節

- (10) In fact, male and female vocabularies are **different enough that** dialogue between a man and a woman in a Japanese novel can omit ‘he said’ and ‘she said’.
(Emphasis added.)

ここでは、different enough that という表現が用いられているが、学校文法で学習する表現では so different that となるところであろう。『ジーニアス英和辞典』には、アメリカ英語で enough (so) that とも言うという解説があり、次の例文が示されている¹¹。

- (11) The accident was serious enough that I sustained severe injuries to my left leg and my left arm.

この種の表現はアメリカ英語に限定されており、いわゆる標準語法ではないことから、以下に示すような「形容詞＋ enough to do」と「so＋形容詞＋ that 節」の2つの構文が混交して形成されたと分析できるかもしれない¹²。

- (12) a. The hall is large enough to seat 1,500 people.
b. The hall is so large that it can seat 1,500 people.

2.3. different than / to

混交による派生表現としては、different に関する次のようなものもある¹³。

- (13) My impression was **different than** yours / **to** yours. (Emphasis added.)

標準語法では different from のように形容詞 different と共起制限 (cooccurrence restriction) で結びつく前置詞は from となるが、different には比較の意味合いが含意されているため、アメリカ英語で than が、イギリス英語で to が用いられることもある。『英語語法大辞典』によれば、different than および different to は以下のような混交から派生したものの解説

11 小西友七・南出康世(2006)『ジーニアス英和辞典』第4版。東京：大修館書店。p. 654.

12 同辞典 p. 653. なお、a は「1500人収容できるだけの広さがある」に対して、b は「ホール自体が広いことを強調する」という。

13 江川泰一郎(1991)『英文法解説』改訂三版。東京：金子書房。p. 414.

がある¹⁴。

- (14) a. different than < different from × other than¹⁵
b. different to < different from × dissimilar to, opposed to, contrary to

なお、Quirk et al.(1985:1131)は、(15)aのように different than に名詞句のみが後続する場合、文法性が低下すると指摘している¹⁶。ただし、(16)のように、目的格代名詞が続く場合は許容される。

- (15) a. ?Films are very different than plays.
b. Schools are different than they used to be.
c. They are playing in a very different way than (they played) before.

- (16) He was much older than me.

than は本来、接続詞であり、前置詞の from とは性質が異なるためと考えられる。しかし、近代英語以降、than のあとの代名詞が主格で、主節の動詞が自動詞の場合、(16)のように目的格代名詞をとるようになり、前置詞の性格を帯びることとなったようである¹⁷。

2.4. both A, but also B

混交の例をもう一つ見てみよう。次の例は、both A and B と not only A but also B の2つが融合した、both A, but also B という式型の表現になっている¹⁸。このような表現がどの程度認知されているのかは現時点では不明であるが、ブリティッシュ・カウンシルから出されている文書の中の表現であることから、単なる言葉の乱れとは考えにくい面もある。

- (17) English is remarkable for its diversity, its propensity to change and be changed.
This has resulted in **both** a variety of forms of English, **but also** a diversity of cultural contexts within which English is used in daily life.

14 前掲書『英語語法大事典』p. 980.

15 『ジーニアス英和辞典』p. 1381をはじめ、多くの辞書で other from が古い表現であると表記されている。その後、other の '-er' が比較級を連想させたため、other than という形式になったのであろう。

16 Quirk, Randolph et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.

17 寺澤芳雄(1997)『英語語源辞典』東京：研究社。 p. 1421f.

18 Graddol, David (1997) *The Future of English?* The British Council. p.5.

(Emphasis added.)

他にも、以下のような混交の例が知られているが、元々は誤用であるため、どの程度容認性があるのかは不明である。(18)a は『ジーニアス英和辞典』にも掲載されているので、もはや誤用ではなくなっているものと思われる。(18)c は日本語の例であるが、現時点では誤用とって良いであろう¹⁹。

- (18) a. cannot help but do < cannot help doing × cannot but do
b. no sooner . . . when < no sooner . . . than × scarcely . . . when
c. *的を得る < 的を射る × 当を得る

- (19) a. *I cannot help but feel* conventional apologies are all in vain.
b. But *no sooner* was it afternoon *when* Lil was back.

2.5. which is why

本節では、*this is why* あるいは *that is why* という表現の *that* が関係代名詞に置換された例について考察する。広い意味で、これも混交の一種と考えられると思われる。

- (20) a. Notice, by the way, that the choice of *an* or *a* is determined on the basis of pronunciation, not spelling, **which is why** we say *an M.A. degree* and *a U.S. dollar*.²⁰
b. Two of the main tribes in this group came from regions called Angeln and Saxony, **which is why** we call the language they brought to Britain ‘Anglo-Saxon’.²¹ (Emphasis added.)

これらは、元々は次のような標準語法からの派生的な表現である²²。

- (21) a. Bill is very talkative. This is why I don’t like him.
b. That is why he returned.

19 例文(19)は石橋幸太郎(編)『現代英語学辞典』東京：成美堂。p. 127からの引用。

20 O’Grady, William and John Archibald (2005) *Contemporary Linguistic Analysis*. Sixth Edition. Toronto: Pearson Longman. p. 112.

21 前掲書 *The 5-Minute Linguist: Bite-sized Essays on Language and Languages*. p. 227.

22 例文はそれぞれ『ジーニアス英和辞典』p. 2189、小西友七ほか(1994)『ランダムハウス英和大辞典』第2版。p.3111からの引用。

(20)は、(21)aのように2文で表現することも可能であるが、指示代名詞を関係代名詞にすることで、先行する文に関係づけた形になっている。文を並行的に羅列しないことにより、2文がより一体感を持って表現されていると思われる。

類似した表現に、以下のようなものがある。

(22) He is well off, and *what is more*, he is of good birth.²³

(23) a. He told the truth and, which is more, people recognized his statement to be true.²⁴

b. He told the truth and, what is more, people recognized his statement to be true.

大塚・小西(1990:1013)では、Partridgeの説として、(23)bではなく(23)aのように、*which is more*に訂正すべきであると、述べられている。しかし、実際には(22)のような*what is more*も容認されていると思われる。下に、類似の例を列挙しておく。

(24) a. She is a quick learner and, **what is more**, she remembers what she has learned.²⁵

b. We got lost in the dark and, **what was (still)worse**, it began to rain.

(25) a. He has health, and, **what is more**, wealth.²⁶

b. He is settled in the country, and **what is more**, comfortably settled.

c. It was getting dark, and, **what was worse**, it began to rain.

d. He is selfish and, **what is worse**, dishonest.

(23)に戻って、*what*の代わりに*which*が用いられているのは、複合関係詞*what*が関係代名詞*which*に置換されたと考えられる。複合関係詞だとすると、独立性が高く、挿入節としてはふさわしくないのかもしれない。それに対して、*which*を用いると、全文の中に関係詞を通して位置づけられるので、挿入的な用法と合致するのかもしれない。もしそうだとすると、前述の*which is why*と同列に扱う、つまり混交の一種として捉えることが出

23 『ジーニアス英和辞典』p. 2174.

24 大塚高信・小西友七(共編)(1990)『英語慣用法辞典』改訂版. p. 1013.

25 前掲書『英文法解説』p. 86.

26 安井稔(1996)『英文法総覧』改訂版. p. 354.

来るように思われる。しかしながら、手元の文法書を見る限り、(24)、(25)のような *what is more* の例も多く見られるので、必ずしも *which is more* の方がより適切であるとは必ずしも言えない。また、*which is more* は文語であると表記している辞典もある²⁷。

最後に、興味深い観察として、入手した用例を見る限り、*what is more* がほとんどの場合、挿入的に用いられているのに対し、*what is worse* は単独で文頭にも生起可能と思われる点である。単なる偶然なのか、それとも *more* と *worse* の違いなのか、さらに調査・検討する必要がある。

(26) Receiving room has mislaid an order and we have to find it. *What's worse*, the bride and her ten attendants will be here in half an hour.²⁸

(27) You could have been killed. *What's worse*, you put your family in danger.²⁹

2.6. This is Harry speaking.

本節では、電話口でよく使われる *This is ~ speaking* について考察する。安藤(2005:26)は、これを「混交による派生文型」と捉えている³⁰。具体的には(28)b のような混交である。

(28) a. This is Harry speaking.
b. This is Harry × Harry is speaking.

安藤が述べているように、この文を *This is Harry (who is) speaking* のような限定用法の関係節を仮定した基底構造から派生することはできない。江川(1991:78)によれば、(29)を *My wife who is away in Osaka will be . . .* とすると、大阪に行っている妻以外にも別の妻がいることを含意してしまうという³¹。安藤が言うように、内在的に「定(*definite*)」であるような先行詞に限定的な関係節は接続できないのである。また、固有名詞や人称代名詞に、関係節や形容詞が修飾語句として接続しないのも同じ理由からである。

(29) My wife, who is away in Osaka, will be back tomorrow.

27 竹林滋(2002)『新英和大辞典』第6版。東京：研究社。p. 1606.

28 前掲書『英語慣用法辞典』p. 1013.

29 『ジーニアス英和辞典』p. 2222.

30 安藤貞夫(2005)『現代英文法講義』東京：開拓社。

31 前掲書『英文法解説』。

(28)に関しては、電話口で「こちらはハリーです」と告げる内容であるので、This is Harry を想定するのは妥当かもしれない。しかし、安藤(2005:27)が類例としてあげる次のような文の場合はどうであろうか。

(30) a. “What’s that smell?” “It’s **porridge burning.**”

b. It’s porridge × porridge burning.

この場合、「あのおいは何だ」という問いに対して、「ポリッジです」では答えにならないであろう。適切な答えとしては、「ポリッジが焦げているんです」である。したがって、It’s porridge burning.の基底構造としては(30)bではなく、(31)のような構造を仮定する方がより理にかなっていると思われる³²。

(31) It’s porridge burning.

同様に、次の(32)の場合も、「友達が呼んでいるんだよ」と説明して出て行ったのであり、「(それは)友達なんだよ」では文脈に合致しない。したがって、(31)と同様に、(33)として分析する方が良いと思われる。

(32) ‘It’s **a friend calling me,**’ I explained, and went out.

(33) It’s a friend calling me.

以上のことから、(28)aが何らかの混交による派生文型であることを認めた上で、次の(34)に見られるような構造を提案する³³。この分析は、安藤とは異なり、(35)のような混交に基づくものである。また、(31)、(33)については、(36)のような混交を想定したい。

(34) This is Harry speaking.

(35) This is . . . × Harry speaking.

(36) a. It’s . . . × porridge burning.

b. It’s . . . × a friend calling me.

32 (31)と同趣旨の考え方は、すでに Jespersen に見られるものである。

33 ここで、Harry speaking は従属主述関係 (dependant nexus) になっている。

最後に、**this** と **it** の違いについて触れておく。前者は、「こちらは」という意味の指示代名詞と考えて差し支えないと思われるが、後者は特定のことを指して「それは」と言っているのではない。したがって、「話し手と聞き手にはわかっているその場の漠然とした状況を指す」、いわゆる状況の **it** であると考えべきである³⁴。

また、安藤(2005:27)は、次のような文に関しても(37)bのような、混交による分析を提案している。

- (37) a. **It's you're** the fool.
b. **It's you** × **you're** the fool.

前出の(31)、(33)においては、主述関係を表す部分、すなわち□で囲った部分は非定形節(non-finite clause)であるのに対して、(37)では定形節(finite clause)になっている。(37)aは「おまえさんがばかなんだよ」という意味であるから、それを直接(38)のように **It's** の補部節として主述関係を表す節が生起していると思える。

- (38) **It's** you're the fool.

ただし、語順的に見ると、**you** は **the fool** の主語であると同時に、**It's** の補語ともなり得る位置に生起している。したがって、**you** が補部節から主節の要素へ「格上げ」されている側面もあると考えられる。それが和訳の「おまえさんが」に見られる「が」という格助詞として具現され、新情報(new information)として提示されているのである。英語の場合、主格代名詞が **It's** の補語位置に格上げされた結果、(39)bに見られる **me** のように、目的格代名詞となることがある³⁵。

- (39) a. **It was I** did it!
b. **I was me** notified the sheriff.

このような定形節が **It's** に後続する例は、次のような文とも関係することは明白である³⁶。

34 前掲書『英文法解説』p. 48.

35 前掲書『現代英文法講義』p. 27.

36 (40)の例は、Harris, Martin and Nigel Vincent (1980) 'On Zero Relatives.' *Linguistic Inquiry* 11. p. 805、Quirk, Randolph et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman. p. 959、Milsark, Gary L. (1977) 'Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English.' *Linguistic Analysis* 3. p. 1 からの引用。

- (40) a. There's a woman wants to see you.
- b. There's a man lives in China.
- c. There were several people cycling along the creek.

ここでも、主格関係代名詞削除を用いた変形分析も可能であるが、There's に定形節が後続するという基底構造を仮定することも可能であろう。

- (41) There's a woman wants to see you.

ちなみに、It's に後続する位置には、(31)のような-ing 形の非定形節、(38)のような定形節のほかに、動詞が過去分詞、不定詞、前置詞句を伴う句が生起することもある³⁷。

- (42) a. "It's Stephen *come back*" was the answer.
- b. It's you *to say* what's to be done.³⁸
- c. It's a great weight *off my mind*.— It's rather a weight *on my wife's*, I'm afraid.

3. 言語研究の方法

第2節では、英語に見られるいくつかの言語現象に焦点を当て考察してきた。取り上げた現象は、規範的(prescriptive)な英文法の枠からこぼれ落ちるようなものもあり、それ故、文法書などでは言及がまったくないか、せいぜい断片的に触れられる程度であるかもしれない。また、中には元々誤用であったものが、時を経て一般的な表現に格上げになったものもあり、正用と誤用の境界線が曖昧なところもある。しかしながら、言語学および英語学は、規範的な学校文法とは異なり、記述的(descriptive)な態度で言語現象と向き合うので、正用であろうが誤用であろうが、現に当該の言語現象が存在する以上、それに何らかの説明を与えなければならない。ただし、その説明は、当該の言語現象にのみ適用するような説明では不十分で、類似した他の表現や要因なども巻き込むようなものである必要がある。

「はじめに」でも述べたように、外界の現象はほとんどが連続的なもので、そこには通常、確たる境界線は明示されていない。その現象をどのように「見る」かによって、境界線は様々に引かれるものである。例えば、(43)のような連続体がある時、(44)に示されるように、現象のどこに注目するかによって、さまざまな分類・整理が可能である。外見の正方形と円に分ける分析((44)a)、内部に何らかの要素を含むものとそうでないものに分

37 前掲書『英語語法大事典』p. 1117.

38 「どうしたらよいかは君が言うのだよ」という意味を表すが、「言う」のは未来の出来事である。それを、to 不定詞を用いて表現しているのである。

ける分析((44)b)、などである。

(43) □□□□□□□□□□□□□□

(44) a. □□□□□□□□□□ | □□□□

b. □□□□□□□□□□□□ | □□□□

c. □□□□□□□ | □□□□□□□ | □□□□

d. □□□□□□□ | □□□□□□□ | □□□□

e. □□□□□□□□□□ | □□□□

現象そのものはひとつでも、分析の仕方によっては、色々な側面を見せることが可能である。どういう基準で分類・整理するか、その分類にどのような意義があるか、などを示すところに、分析者の独創性(オリジナリティ)が現れるのである。そのためには、当該の言語現象をよく観察するとともに、他の現象とどのように関連するか、関連づけられるかを検討しながら、それに最も適した位置づけを、有機的な文法体系の中に見い出すことが肝要である。比喩的に言えば、料理に使う素材は同じであっても、調理の仕方いかんによって、創意工夫の見られる一品にもなるし、またおいしい料理にも、まずい料理にもなり得るのである。まさに、どう腕を振るうかによって料理の良し悪しが決定されるのである。それと同じように、目の前の言語現象をどういう視点から見ることによって、分析の良し悪しが決まるのであり、良い分析は新たな知的洞察を与えるものである。

4. まとめ

本稿では、「英語学・言語学の可能性」と題して、種々雑多な事柄を述べてきた。初等教育および中等教育では、国語や英語の学習が実践されてはいるものの、生物学や物理学などと比べて、英語学や言語学はあまり世間に周知されていないように思われる。ひとつには、言葉とその総体である言語が、ごく日常的なコミュニケーションの道具として用いられるため、人々の意識に昇ることが少ないからであろう。また、言語は基本的には音声の主体であるため、通常は目に見えないものでもある。あるいは、かりに言語の構造やメカニズムがわかったところで、それを日常的な言語使用に意識的に活用する機会がほとんどないからかもしれない。

しかし、言語研究を通して、言葉の機微に触れたり、たとえわずかであっても知り得た事柄は、その人の言語生活を直接的・間接的に豊かにしてくれるものである。その実践として第2節では、いくつかの言語現象に向き合い分析や考察を加えてみた。

第3節では、言語研究の方法論として、分類・整理の仕方、つまりは分析の仕方や物の見方に、独創性を発揮できる可能性があることを述べた。

最後に、ある推理小説の中の一節を引くが、言語研究には、事件の真相究明を目的とし

た探偵仕事のような側面があるように思われる。真犯人に辿り着くためには、さまざまな推理を巡らせなければならないが、言語研究にも通じるところがあるように思われる(下線は筆者)。

自室に戻り、パソコンの前に坐った。無表情の灰色の画面を見つめ、その奥に詰め込まれてある事件の断片を自分の脳裏に移して寄せ集め、ジグソーパズルのように組み上げる作業を試みた。

(中略)しかし、その新事実が生じたことで、いままで見つからなかったパズルのパーツの一つが、カチャッと大きな音を立てて、欠けた部分に収まった³⁹。

何の接点もなさそうな記憶の断片が、ジグソーパズルのチップを嵌め込むように、整然と並ぶのが見えた。

浅見の全身を悪寒が走った。

ほんの些細な疑惑や、積み残してきたかすかな拘りが、いくつもいくつも思い浮かんできて、それが有機的に反応し結合し、一つのストーリーを形作っていった⁴⁰。

思い返せばいくつもの徴候らしきものは顕れていたのだ。その一つ一つがあまりにも些細で、さり気ないものであっただけに、何も思うことなく通過してきてしまった。

しかしそれらを繋ぎ合わせれば、やはり結論の向かうところは一つしかなかつた。そしてジグソーパズルは完成する⁴¹。

上の引用に共通するのは、真犯人を突き止める行為をジグソーパズルに喩えている点である。事件当初、真犯人が誰なのかはもちろんわからない。その後調査を進めていく過程で、犯人と思しき人物が浮上するものの、なかなか確証が得られない。なおも、事件の隅々に至るまで徹底した調査の範囲を広げていくと、何年か前の出来事が発端となって、事件が起きたことが判明してくる。そうして、初めは別々の点でしかなかったものが次第に線で繋がるようになり、一気に真犯人に辿り着く、というのが大方の推理小説に見られる構成であろう。

言語研究の場合も、個々の現象のみを見ては不十分である。他の現象の分析も視野に入れながら、それとどのように関連するのかを考えなければならない。その過程におい

39 内田康夫(2002)『藍色回廊殺人事件』東京：講談社文庫. p. 312.

40 同書 p. 378.

41 同書 p. 383.

では、あたかもジグソーパズルを組み上げるときのように、なかなか全体像が見えない、というもどかしさをしばしば感じるものである。しかし、それに堪えて、すべてのパーツのひとつひとつが、収まるべき所に収まったとき、全体像が晴れ渡って見えるようになるのである。上の引用の中で、下線が施されているような経験をすること、それが(言語)研究の楽しさであり、醍醐味でもある。